



## 自然を語る会

7月15日（土） 10：00－12：00 日比谷図書文化館セミナールーム

ポール・ブルックス著「レイチェル・カーソン」第15章を読む

参加者：14名

担当：小川真理子さん

今回は、掲題の第15章「たえず変貌するわれらの浜辺」を取り上げ、小川さんの解説のもと、皆で輪読し、語らい、カーソンの観察力に富んだ自然描写と詩情に溢れる作品を味わった。この短いエッセイは1958年の雑誌「ホリデー」に掲載されたもので、1955年刊行の『海辺』でテーマとなった陸と海とのかかわりの中で変化する地形や地質、そこに生息する様々な生きものの生態が、ここでも見事に描かれている。満月の夏の夜、満潮に呼応して海から這い上がり浜辺に産卵し、受精するカブトガニの行動は驚異である。それが遠い原始の時代から綿々と続いている生命の営みなのだ。そのような情景を目の当たりにするとき、人にとって時間という障壁はなくなる。そして原始の地球、生命の不思議さに思いを巡らせるのだ。このような貴重な体験を得ることができる未開の海辺も、人々の開発により失われていく状況にある。人の手が入らない原始のままの海岸線を残すことの大切さを訴える終段は、海辺を愛したカーソンの心底からの力強いメッセージである。

当日は、小川さんより大潮の日のウミシヨウブの受粉行動など関連エピソードの紹介があり、また持参のポータブル顕微鏡で世界各地の砂の標本を観察し、皆で自然の不思議さを楽しんだ。

（文責：井上正太）

